

青年の自己形成現象としての認知的再構成

—ライフイベントと意味づけ, その変容過程に着目して—

山田 剛史

(神戸大学大学院総合人間科学研究科)

【問題意識】 人間とは時間的存在である。青年の発達現象としての自己形成という現象に着目した場合、時間(過去—現在—未来)の問題はどのように扱われているのであろうか。研究自体が少ないものの自己形成に関わるキーワードを中核に据えた心理学的研究を概観すると、そのほとんどが“(未来の認知的対象への)志向性”として位置づけられている。形成研究は概念研究とは異なり、その大きな相違点は時間存在の有無にある。筆者はこれまでに、主な自己形成研究として、理想自己を軸とした研究(山田, 2002, 2004a)、日常的活動を軸とした研究(山田, 2003a, b, c, 査読中 a)を行ってきた。時間の観点から両者を評価すると、前者は未来を対象としており、後者は現在と未来を対象としている。そこで、現在着目しているのが過去次元を取り入れた自己形成研究であり、山田(2004b, 査読中 b)として遂行中である。本稿では、その結果も踏まえつつ現時点における成果の一部を報告する。

現象着目への契機的研究(研究1)

【目的】 本研究では、大学生活から全生活史へ展望の範囲を拡張し、これまでの人生で成長した体験に関する、時期・内容・意味づけの変容・契機・得られたことといった一連の語りから、自己形成のダイナミクスについて検討することを目的とした。

【方法】 対象者: 私立大学の2・3年生 30名。調査時期: 2003年7月下旬～8月上旬。方法: 面接によるインタビュー調査。質問内容: “これまでの人生を振り返って、良かった・変わった・成長した体験”についての語り。

【結果と考察】 成長体験を語った26名中、否定的に意味づけられた体験をあげたものが8名、肯定・否定両側面がみられたものは9名と、全体の65%が体験当時には何らかの否定的な側面を付与していた。そこで、この変容の契機に関する検討を行ったところ、こうした変容は「自己」の側の対象化や部分的肯定的感情に「他者」からの働きかけや相互作用が非線形的に絡み合った結果生じたことが示唆された。これより、自己形成における過去次元の果たす役割・可能性が垣間見え、「(否定的)過去体験に対する肯定的方向への認知的再構成」(現象レベルでは、“あの時辛かったけど、あの体験があったから今の自分がある”など)として自己形成が位置づけられた。ただし、これはある程度探索的要素の強い検討による副次的結果として得られたものなので、さらなる検討が必要課題となった。

ライフヒストリーグラフによる検討①(研究2)

【問題と目的】 研究1では、「成長した体験」という価値づけ(肯定的側面)が研究者の側によってア・プリオリになされていた点、面接という非常にコストのかかる方法を用いていた点から、“ライフヒストリーグラフ”の作成といった青年の自己理解促進をも意図した質問紙調査法を考案した。これは、時間軸(過去—現在—未来)を横軸に、出来事の印象度(+・±・-)を縦軸にとり、そこに過去のライフイベントをプロットしていくというもので、さらにその中から選ばれた出来事に対する意味づけを記述してもらうという

よう構成されている。本研究では、抽出する出来事に価値づけを与えず、その出来事体験時の感情と現在の感情との変容パターンの様相について検討することを主な目的とした。

【方法】 対象者：専門学校(医療・福祉系3年制)の1・2年生42名。**調査時期：**2003年10月と2004年1月。**方法：**記述式質問紙調査。**質問内容：**自分にとって重要な体験・出来事(最大4個)に対する「当時の感情」と「現在の感情」についての記述。

【結果と考察】 選出された出来事(計154個)に関して、学校段階では「高校期」を、内容面では「部活」「人間関係」をあげるものが多くみられた。各意味づけは、出来事に対して付与された性質から、肯定的と否定的なものに輻輳的(肯定・否定の入り混じった記述)なものを加えた3つに区分しており、3(過去)×3(現在)で計9タイプ設定された。そして、全体の61%は何らかの形で肯定的方向へ意味づけが再構成されていた(肯定から肯定への平行変化を加えると85%にも達する)。このことから、人生の中で体験する様々な出来事に対する意味づけは、固定化されたものとして存在するのではなく(出来事そのものは変わらない)、何らかの経緯を経て肯定化(組織化)されていくことが示された。

ライフヒストリーグラフによる検討②(研究3)

【問題と目的】 研究2では、全9個の過去から現在にかけての意味づけの変容パターンのうち、肯定化のみられた4つのパターンを中心として質的検討を行った。しかし、こうした変容がどのようにして生じるのかについての検討が考察の域を出るものではなく、課題として残された。本研究では、同様の方法を用い、この変容を生み出す要因およびそのプロセスについて検討することを主な目的とした。

【方法】 対象者：専門学校(医療系3年制)の1年生47名。**調査時期：**2004年6月。**方法：**研究1同様。**質問内容：**重要な体験・出来事(最大3個)に対する「当時の感情」と「現在の感情」に「感じ方が変わった理由・きっかけ」の質問項目を加えた。

【結果と考察】 全記述数138個を対象に、それぞれの特質を抽象度を上げて検討した結果、過去体験に対する意味づけの変容は、「物理的時間経過や環境変化といったマクロレベルに規定されつつ(物理的要因)、そこに親や友人といった他者の存在・働きかけ・交流(他者要因)や、当該体験の克服や新たな体験による補償作用(自己要因)といったミクロレベルの変容促進要因が加わる(第1段階)。さらにそのことによってある過去時点(あるいは現在)において対象化・相対化・他者化といった自己内対話によるメタレベルのポジショニングが誘発される(第2段階)。そこで生じている意識的・無意識的変容が、日常(あるいは面接)場面で語られたり、調査などによって文章化されたりすること(表出レベル)によって顕在化する(第3段階)」といったプロセスを経て生じていることが推察された。

まとめと今後の課題

上記諸研究では、自己形成を“時間的(過去次元)に拡張して捉えたということ”“実際に体験した出来事(外的側面)と意味づけ(内的側面)との相互作用から捉えたということ”が主な利点としてあげられる。

今後の課題としては、各時間次元の有機的連関、つまり“個人の中で実際に経験した過去体験の持つ意味づけが、現在置かれている状況・文脈や個人の興味・関心、あるいは理想や目標といった未来の自己像との関連の中で想起・再構成されるといった相互不可分離の循環運動”、の中で現在という瞬間を生きる青年の自己形成について検討していくことがあげられる。

(YAMADA Tsuyoshi)